

2022年7月24日(日)／説教者：國分美生

説教：「怒れるイエス」

聖書：マルコによる福音書11:15～19

イエスは、虐げられ、蔑まれるような人々を生み出すこの世の仕組み、不平等で不公平な社会の有様をみて、悲しんだり怒ったりしました。

イエスの伝道活動は、紀元1世紀頃、ローマとユダヤの支配者である「ヘロデ王朝」から二重の支配を受けていたガリラヤから始まりました。本日の聖書は、イエスと弟子たちがエルサレムに入城した、次の日の物語です。神殿の庭に入ってきたイエスはそれらの様子を見て、おもむろにそこで商売をしていた人々を追い出しはじめ、両替人のテーブルや、鳩を売っていた者たちの腰掛をひっくり返します。実はエルサレム神殿を再建したヘロデ大王の意図は、宗教・政治・経済のすべてを自分の思いのままにして、神殿を中心とした、神殿国家体制を強化することだったのです。その神殿国家体制を支えるための重い税金は、貧しい庶民の人々を苦しめました。イエスの行動には、神殿国家体制に対する怒りと痛烈な批判と、強い「否」が込められていたのです。

さらにもう一つ注視すべきことは、この商売人たちが店を広げていた神殿の庭というのは、祈りを捧げに来た異邦人の祈りの場所だったということです。イエスはイザヤ書を引用して「私の家は、あらゆる民族のために、神から祈りの家と呼ばれるであろう」とはっきり書いてある、と神殿境内にいた人々に教え諭します。

神の国の到来とはこの世の、この社会の人間による常識や価値観がひっくり返ることを伴います。神の国の到来とは、私たちがこれまで縛られてきた価値観から解放されるということです。この、古い価値観がひっくり返る、ということは具体的には、邪魔者扱いされて社会的に排除されていた人が、その人の本来の価値を正當に認められる、とか。労働力を搾取されていた人がその労働に見合った賃金をきちんと支払われるとか。基地はいらない、戦争はしないと叫び続ける声がきちんと聞き入れられることです。

このあとイエスは政治犯として十字架刑で処刑されることを聖書は示していますが、それこそ、神の国の到来が、つまり今の時代の価値観が転倒することが時の権力者・支配者たちにとって脅威であったことがわかります。今の私たちの社会の権力者も同じです。ですが、神の国の始まりが始まっていることに信頼します。目の前の不条理に対し、イエスのように怒怒りの感情をもっているんです。私たちにとってそれは、平和を求める原動力になります。(國分美生)